

特選

小川 廣男
小池 正博
西田 青沙
森川 敬三
共選

半歌仙『梢は雨を』の巻

奈良県 奈良県連句協会

森本 章子 捌

月はやし梢は雨を持ながら

芭蕉翁

素謡の声満つる新涼

森本 章子

美術展孤高の画家にひたりいて

井内 温雄

余白を残す模範解答

岡谷 樹

AIも分からぬらしい近未来

嵯峨澤衣谷

昼寝の猫のまぶたヒクヒク

松本奈里子

秀吉の膝にゆるりと大西日

樹

謙虚なおなご居るかそんなの

温雄

多面体きのうの君は右にズレ

奈里子

いつの間にやらついに戦前

衣谷

九条に託す国民騙されぬ

温雄

秘蔵の酒は志野の片口

樹

少しずつ細りゆく月神の留守

衣谷

長元坊のおおらかな舞い

奈里子

海原をボトル無傷で流れ着き

樹

「つつがなきや」とかぐや姫より

章子

目もあやに行く手をふさぐ花吹雪

奈里子

餡がたっぷり父の草餅

衣谷

令和八年四月二十七日 満尾 於 文音

入選1

半歌仙『古川にこびて』の巻

大分県 かおみ連句会

南雲 玉江 捌

古川にこびて目を張柳かな

芭蕉翁

お玉杓子か覗く水底

南雲 玉江

楽団は春外套を揃ひ着て

木村 ふう

礼儀正しきとつ国の人

五郎丸照子

満月に薄茶ゆるりといたきぬ

岡本 遊風

松茸を焼く匂ひ漂ふ

園田 保博

美術展話題のジブリ予約制

玉江

魔女のリボンが似合ふあの娘と

ふう

ことのほか僕のこと好きだったんだ

照子

結婚式は神前でする

遊風

旅立ちの酒宴涙と笑ひ声

保博

日米首脳評価其々

玉江

風疹く幾万の墓照らす月

ふう

寒犬を抱きパンと一緒に

照子

巷では産めよ増やせよ奨励し

遊風

少年野球母の応援

保博

故郷の山重なりて余花の雨

玉江

麦藁帽を吊すよろず屋

ふう

令和八年三月二十八日 満尾 於 リモート

入選2

半歌仙『初時雨』の巻

京都府 ふたば会

三原 寿典 捌

旅人と我が名呼ばれん初時雨

芭蕉翁

坂道急ぐ大根車

三原 寿典

まめ皿に好みの模様絵付して

尾崎志津子

なんと金糸雀籠を抜け出し

寿

手品師の技鮮やかに月今宵

志

小瓶に活ける庭のコスモス

寿

ニーチェ読み南京豆をぼりぼりと

志

嫁の写真に足した口髭

寿

火遊びとはじめは思ふてをりました

志

白装束でお百度参り

寿

美しき広き田畑は山に果つ

寿

鉄橋を渡る列車の汽笛

志

夏の月007走り去り

寿

地球のツボに焙烙灸を

志

繰り返し目を背けたくなるニュース

寿

水温むころ良き便り受け

志

故郷のみちのくの花爛漫に

寿

友と一献暮れかぬる窓

志

令和八年四月十八日 満尾 於 文音

入選3

半歌仙『麦の穂を』の巻

三重県

木村 ふう 捌

麦の穂をたよりにつかむ別れかな

芭蕉翁

径は登りにいざ時鳥

木村 ふう

汗みどろこの一球を追いかけて

松岡 芳恵

うめ・のり・おかか母のおむすび

ふう

満月は案内の如し夜行バス

芳恵

新調スーツ赤い羽根付け

ふう

美術展受賞の言葉とうとうと

芳恵

息子のような童顔の夫

ふう

お姫様抱っこ支えるプロテイン

芳恵

高虎さんに学ぶ転職

ふ

津うと伊勢持ちつ持たれつええ感じ

ふう

御神酒をそそぐ年湯やわらか

芳恵

達観の懷手して月淨し

ふう

自由通航願う海峡

芳恵

此の国の次の世紀も花満ちよ

ふう

初産終えて眠る親猫

芳恵

臍蜜柑色鮮やかなジャムとなり

ふう

ドレミの歌が丘の上から

芳恵

令和八年六月二十五日 満尾 於 電子メール文音

入選4

半歌仙『降り残す』の巻

愛媛県 つれづれ連句会

名本 敦子 捌

海は晴れて比叡降り残す五月かな

芭蕉翁

蜜柑の花の香りくる駅

名本 敦子

軽やかなピアノの音に聴きほれて

原田 義徳

頬杖ついて遠き夢追ひ

二神 重則

差し切つて女性ジョッキー優勝し

新井 文子

玉兎渡れる数へ日の空

片山 良子

マフラーを巻き直すべし総理殿

富樫 美雪

仮面の下の顔が気になる

義徳

いさかひも愛も地軸を揺るがせて

敦子

彼の仕草をまねてマルボロ

文子

それぞれの歴史を乗せて移民船

重則

新酒できたと招く杉玉

美雪

権禰宜のこつそり潜る月の門

敦子

かりがねの声遠ざかりゆき

良子

つれづれに記す日記が文学賞

義徳

飴一粒がトランキライザー

重則

うたかたの遊ぶ水面に花筏

文子

種蒔く人の指のからやか

良子

令和八年七月二日 満尾 於 喫茶チャンプ

入選5

半歌仙『城跡や』の巻

東京都 猫の目連句会

江口 足人 捌

城跡や古井の清水まづ訪はん

芭蕉翁

案内役のしやれた白服

三輪 慶子

音合はせオーボエのラの先立ちて

鈴木 牛後

漢字ドリルの角の折れたる

江口 足人

満月へ着かんとのぼる昇降機

山本 半片

木樵の辿る猪の道

牛

結跏趺坐ゑのころ草にくすぐられ

慶

悪い遊びを共に覚える

半

イタリアの離島に永遠を誓ふふり

人

同衾なれど夢は各々

慶

食卓の隅だけ使ふひとり酒

牛

座敷童子にもらふ霊薬

人

戦争の電光ニュース月冴えて

牛

綿虫追うて漂泊の旅

半

庭球の初優勝を目指す兄

慶

八十吉のつぼ床の飾りに

半

拝殿をふはりと包む花盛

人

風に向かひてぶらんこを押す

牛

令和八年六月七日 満尾 於 文京区民センター 会議室

入選6

半歌仙『夕顔に』の巻

愛知県 猫蓑会 ひなの会

石川 葵 捌

夕顔に見とるるや身もうかりひよん

芭蕉翁

幾何学模様に糸をはる蜘蛛

石川 葵

皿小鉢旬の総菜盛られゐて

西田 荷夕

にらめっこする腕白な子ら

坪井まちこ

月影にテトラポッドと流木と

葵

残る燕の休む店先

夕

ずつしりと重たき梨をわたす婆

ま

昔話の里に暮らして

葵

8インチ硝子の靴の恋模様

夕

僕を虜にさせるブロンド

ま

ささやかな幸せのせて木の葉散る

葵

小夜曲むせぶ月凍る窓

夕

戦友はシャーマンの裔まづ酒を

ま

神の救ひはありやなしやと

葵

よく吠える犬に優しく声をかけ

夕

春のコートの色は明るく

葵

ポケモンの水筒ふたつ花筵

ま

一村こぞり茶摘みする畑

令和八年七月十四日 満尾 於 みよし市カリヨンハウス

入選7

半歌仙『扇乗せて』の巻

大阪府 奈良県連句協会

角谷美恵子 捌

富士の風や扇に乗せて江戸土産

芭蕉翁

青葉潮分け白き帆船

角谷美恵子

折鶴はちさき嘴とがりゐて

松本奈里子

裁縫箱にぼたん百種

岡谷 樹

アイデアを膨らます座へ月さやか

林 典子

木の実降る音似たる心音

もりともこ

鷗外の門の辺りに小牡鹿が

三原 寿典

幼きなりに自我の芽生えも

米倉 洋子

新妻を何度も募集オンライン

洋 里

貸倉庫には秘密満杯

里 節

国宝の阿修羅の像に手を合はせ

節 敏

歌舞伎役者は大見得を切り

増田 敏

月と呑む暖炉に薪をくべながら

里 樹

持病の癪をいやす寒灸

樹 典

ドリブルが勝利引きよせチャンピオン

典 と

ブランコこぎで未来発進

と 節

上棟の札置く梁に花ふぶき

節 敏

春光を浴び田畑潤ふ

敏

令和八年五月十九日 満尾 於 はぐくみセンター&文音

入選8

半歌仙『閑さや』の巻

大阪府 奈良県連句協会

角谷美恵子 捌

閑さや岩にしみ入る蟬の声

芭蕉翁

ゆるゆるのぼる杖に青東風

角谷美恵子

絵手紙の筆は四隅をはみ出して

谷澤 節

公民館は予約制とか

三原 寿典

ガラス珠発掘の田を照らす月

美 節

蔓竜胆の香り仄かに

節 美

妖精がそつと味見をましら酒

寿 節

記念日となる隣り合ふ席

美 節

チャップリン恋はいつでも一目ぼれ

節 美

木場の娘は玉の輿へと

寿 節

国生みのおのころ島の神社札

美 節

深海底に積もる希土類

節 美

凍月は旅の支度を念入りに

寿 節

終末時計残りわづかと

美 節

全資産ビットコインに注ぎ込んで

節 美

春泥まとふ野球少年

美 節

爛漫の花を愛でつつ文士劇

寿 節

連風あがれ雲の上まで

節 美

令和八年三月十七日 満尾 於 文音

入選9

半歌仙『道のべの』の巻 三重県 伊賀ハイトピア連句会

衆議判

道のべの木槿は馬にくはれけり

芭蕉翁

新たに涼し山越ゆる風

安屋 宣子

月明かり名作絵本探すらん

石川つや子

リビングの椅子幼うとうと

森岡貴江子

焙煎のコーヒーの香に集まりて

北山いつ子

ついでを知らず天気予報図

松岡 芳恵

練習の祇園ばやしの笛の音

宣子

皆が振り向くイケメンの彼

つや子

デイト中抱きしめられて頬を染め

貴江子

転勤族の覚悟決めかね

いつ子

飛行機に焦がれてやつと整備士に

芳恵

英語の資料どんと積み上げ

宣子

寒鰯の美味きお店に仲間待つ

つや子

無人駅降り月冴ゆる街

貴江子

怪談の小泉八雲めぐる旅

いつ子

風揚げの声浜辺賑はふ

芳恵

古刹なる寺の境内花盛り

宣子

燕忙しく翔ける巣作り

芳恵

令和八年五月十四日 満尾 於 ハイトピア伊賀・文音

入選10

半歌仙『枝の形』の巻

東京都 夢々
静 寿美子 捌

涼しさや直に野松の枝の形

芭蕉翁

小流れに沿ひ薄羽蜻蛉

静 寿美子

調律師仕上げのワルツ軽やかに

三輪 慶子

スピード抑へ坂の自転車

後藤とみ子

尖塔の先にくつきり今日の月

柳田 宏子

案山子が最後お下がりの服

慶

今年米塩むすびにし山歩き

寿

物怖ちのせぬあの娘気になり

宏

プロポーズ誕生石をわたされて

慶

迷ひ心をしかと封印

寿

経営の才に目覚めて新店舗

宏

町内会の旅は知床

慶

月白く寒行の声こだまして

寿

大縄跳びでギネス登録

宏

検診の結果は良しと地酒酌む

慶

足にからまる公園の猫

寿

貝塚の層の重なり飛花落花

慶

島々つなぐ橋のうららか

宏

令和八年四月十五日 満尾 於 文京区民センター

入選11

半歌仙『猿の面』の巻

徳島県 阿吽の会

梅村 光明 捌

年どしや猿に着せたる猿の面

芭蕉翁

初狂言の奇妙奇天烈

梅村 光明

ラーメンは塩か醤油かかしましく

黄木 由良

日和見すれば大漁と出て

光明

俺の夢俺の望月いま何処

由良

芸術祭を素手で乗っ取り

光明

朋輩の臍に切り傷秋あかね

由良

ちあきなおみの枯れぬ歌声

光明

電源も世間も絶ちて二人の夜

由良

何が私を斯うさせたのか

光明

褒めそやし漸く開くアマリリス

光明

ブルージーンズ夏空の色

由良

新発意の顎に剃刀負け酷く

光明

足跡捜し雪のアルプに

由良

猟犬と本能共に駆け巡る

光明

洋酒の小瓶いつも携へ

由良

咲き進む花花花を惜しむらん

光明

朧月添ふ反戦の会

由良

令和八年七月八日 満尾 於 文音

入選12

半歌仙『蛇喰ふと』の巻

千葉県 三番叟連句会

小原 千秋 捌

蛇喰ふと聞けばおそろし雉子の声

芭蕉翁

なぞへに穂先ほどく早蕨

小原 千秋

雛の客あられほろほろこぼしゐて

杉山 豚望

自由自在に回すえんぴつ

楠崎 陽子

蠟燭をともして迎ふけふの月

陽子

色なき風の渡りゆく辻

豚望

三井寺の僧の乗込む紅葉舟

豚望

恋の呪文はペロペロキャンディー

陽子

背に翼生えれば君のふところへ

豚望

嫁が君ある閨の隅つこ

千秋

政治家の痒いところを搔かぬ指

豚望

夢とうつつを行ったり来たり

陽子

マクベスの眉根しかめる野外劇

豚望

涼しき月に金魚玉透け

陽子

会うたびに背丈の縮む母卒寿

千秋

診察券を旅の荷に入れ

千秋

心地よく酔うて見上ぐる返り花

陽子

アフガン編みの厚きセーター

執筆

令和八年四月二十日 首尾 於 ゐのしし庵

入選13

半歌仙『宵涼み』の巻

兵庫県 奈良県連句協会

山中 広海 捌

皿鉢もほのかに闇の宵涼み

芭蕉翁

ちりんちりと揺れる風鈴

山中 広海

郵便夫長い坂道駆け下りて

岡谷 樹

オッケーを出す映画監督

角谷美恵子

月光のやわらかな息森つつむ

もりともこ

交嘴鳥が好む松の種採り

林 典子

留学生時代祭に飛入りを

嵯峨澤衣谷

夜毎の夢の君のぬくもり

松本奈里子

小悪魔はほんの一秒いたずらに

典子

ナフサシヨックで右往左往し

美恵子

タワマンが視界遮る須磨の海

樹

あまたの窓に白き凍て月

衣谷

冬ざれの故郷積んだ貨車がゆく

ともこ

いつも私は猫をさがして

奈里子

こっそりとクレオパトラの蜂蜜酒

広海

不意の目覚めに陽炎の立つ

樹

曼荼羅へ祈りのごとく花が咲き

美恵子

山笑う頃きつといいこと

ともこ

令和八年六月八日 満尾 於 奈良市はぐくみセンター・文音

入選14

半歌仙『城あとや』の巻

岐阜県 巴世里連句会

各務 恵紅 捌

城あとや古井の清水先問む

芭蕉翁

椎の若葉を吹き抜くる風

津田公仁枝

軽やかに走る少年手を振りて

大竹 花永

ホームに止まる列車一両

奥山 ゆい

山の端を離るる月にカメラ向け

各務 恵紅

頻りに響く松虫の声

公仁枝

どぶろくを回し飲みする旦那衆

花永

畳の緑の少し擦れたる

ゆい

半襟の紫似合ふ女将ゐて

ゆい

あなたとならば生きてゆけると

服部 華宵

AIは危ふいと言ふ若き恋

ゆい

駅前に建つタワーマンション

公仁枝

何もかも白紙に戻す冬の月

塚本 六可

報恩講の読経続けり

柴田 恭雨

老舗より仕出し弁当届けられ

花永

街を隔てる古き堀川

華宵

大空に渦を巻きたる花吹雪

恭雨

心ゆくまで遊ぶ永き日

恵紅

令和八年五月二十二日 満尾 於 ハートフルスクエアーG

入選15

半歌仙『奈良七重』の巻

岐阜県 桃雅会
中森 美保子 捌

奈良七重七堂伽藍八重ざくら

芭蕉翁

佐保姫さまは風と戯る

中森美保子

めかり時ギタートレモロ聞こえて

中西 静子

舌つづみ打つ竈焼きピザ

保

遠来の客をもてなす望の月

静

中州に憩ふ初鴨の群れ

保

秋の灯に古いアルバム取り出せば

静

眉目秀麗あこがれの君

保

突然に結婚しやうと告げられて

静

引いた心に兆すためらひ

保

産土の峡の山里暮れ早し

仝

いたづらっ子はいまや起業家

静

月明り夜能の余韻に浸りつつ

保

年経し梅酒味のまろやか

静

祖母の手はとても器用な魔法の手

保

添ひ寝語りは眠気誘ふ

静

魚跳ねて爛漫の花散りかかる

保

見上げる空に大きな春虹

執筆

令和八年七月二十一日 満尾 於 文音